

## 紫斑病やマメシクイガの適期防除を！



### 1 気象・生育概況

7月は15日の大雨を除いて適度に降雨があり、気温は高く推移したことから（アメダス鷹巣）、中耕・培土の作業は順調に進んだと見られます。

7月31日現在の生育（リュウホウ：5地点平均）は、主茎長が36.3 cm（平年比106%）、分枝数が40.4本/m<sup>2</sup>（同 323%）となりました（図1～2）。また、葉色は35.9（同 103%）、葉数は10.4葉（平年差+1.8葉）となりました。

気温が高く推移し、適度な降雨があったことから、主茎の伸長や分枝の生育が旺盛になったと考えられます。

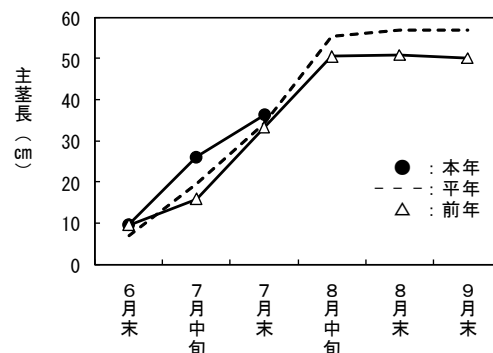


図1 主茎長の推移

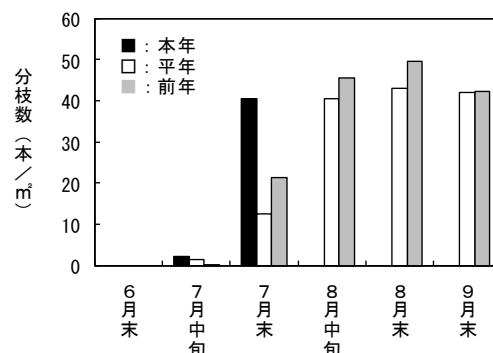


図2 分枝数の推移

### 2 中耕・培土

最終の中耕・培土は、基本的には開花期前までに終了します。開花期後の作業は、花落ちや断根による生育停滞の原因になるため、行わないようにします。畦間等の雑草対策は、**4 除草対策**を参考にしてください。

### 3 干害・湿害対策

大豆は、開花期～子実肥大期にかけて最も水分を必要とする時期となります。基本的には、暗きよの栓を閉めて土壌水分保持に努めてください。

乾燥時に畝間かん水を行う場合、水位は畝の高さの1/2程度として、30 a以上の大きなほ場の場合はほ場を2～3区画に分けて、2～3日かけてかん水し、畝の崩壊や湿害を防止してください。ほ場全体に水が行き渡ったら水口を止め、速やかに排水してください。気温や地温の低下する夕方から夜にかけて作業を行うようにしてください。

一方、大雨等により冠水・浸水した場合は、明きよの溝を補修するなど、速やかな排水に努めてください。

### 4 除草対策

中耕・培土作業終了後の畦間等の雑草は、畦間処理剤等により補完対策を行います。

	農薬名	使用時期及び 使用薬量 (/10 a)	希釈水量 (L/10 a)
畦間処理	大豆バサグラン液剤※	だいた生育期 収穫45日前 300～500 mL	100
	ザクサ液剤	だいた8葉期～収穫28日前 300～500 mL	100～150
	ラウンドアップマックスロード	だいた8葉期～収穫前日 200～500 mL	25～50
畦間・株間処理	バスタ液剤	だいた6葉期～収穫28日前 300～500 mL	100～150
雑草茎葉兼土壌散布 (畦間・株間処理)	ロロックス	だいた3葉期～収穫30日前 100～200 g	70～150
雑草茎葉塗布	タッチダウンiQ	生育期、収穫7日前 0.1 mLを1～3か所/株	2倍希釈

※適用品種はリュウホウとする。

<注意> 畝間及び畝間・株間処理では、薬害防止のため、作物に薬液が付着しないようにします。

## 5 病害虫対策

現在、ツメクサガやウコンノメイガ等の食葉害虫の被害が各地で確認されています。高温年はこれらの害虫の発生が多くなることから、ほ場の状況を十分観察し防除対策を徹底してください。

防除は、使用薬剤のラベルを確認してから行い、周辺農作物へ農薬が飛散しないよう細心の注意を払って作業します。

### (1) 紫斑病 (図3)

開花期20～30日後までに薬剤散布を行ってください。播種時期により開花期が異なるため、ほ場ごとの開花状況（管内平年開花盛期：8月5日）を確認し、散布作業を計画してください。

アミスター20フロアブルは県内で耐性菌の発生が確認されています。薬効低下の恐れがあるほ場では使用を避けてください。

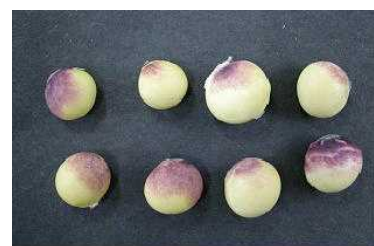


図3 紫斑粒

薬剤名	希釈倍数・使用量	使用時期等
トライフロアブル	1,000倍	1～2回（1回防除を基本とし、着莢期に降雨が多い場合は2回防除とする） 1回目：開花期の20～30日後 2回目：1回目の約10日後
ニマイバー水和剤*	1,000～2,000倍	
プランダム乳剤25*	3,000～5,000倍	
Zボルドー	500倍	
Zボルドー粉剤DL	3 kg/10 a	

※ニマイバー水和剤、プランダム乳剤25：耐性菌出現回避のため各1回の使用とする。

### (2) ツメクサガ

年2回発生し、葉脈を残し葉を食害します。第2世代幼虫は8月に発生し、葉ばかりでなく莢も食害します。今後の薬剤による防除は、8月上旬～中旬にエルサン乳剤1,000倍、トレボン乳剤1,000倍、フェニックスフロアブル4,000倍液を100～300 L/10 a散布します。

### (3) マメシクイガ

成虫は8月20日頃から確認され、9月始めに発生ピークを迎えます。莢表面に産卵し、ふ化した幼虫が莢内に食入しクチカケ豆（図4）を作ります。薬剤は莢に十分付着するよう散布します。

薬剤名	希釈倍数・使用量	使用時期等
アグロスリン乳剤	2,000倍	8月下旬～9月上旬 (1回) 9月上旬 (1～2回)
アディオン乳剤	3,000倍	
パーマチオン水和剤	2,000～3,000倍	
トレボン乳剤・EW、エルサン乳剤、スミチオン乳剤	1,000倍	
プレバソフロアブル5	4,000倍	
グレーシア乳剤	2,000～3,000倍	
トレボン粉剤DL	4 kg/10 a	



図4 クチカケ豆

### (4) フタスジヒメハムシ (図5)

結実後の8月下旬～9月下旬に成虫が莢を舐めるように食害し、直下の子実表面が黒変するため、品質が低下します。

薬剤名	希釈倍数・使用量	使用時期
トレボン粉剤DL	4 kg/10 a	8月～9月 (着莢期～子実肥大期)
アグロスリン乳剤	2,000倍	
トレボン乳剤	1,000倍	



図5 フタスジヒメハムシ成虫

\* 内容についてのお問い合わせは、農業振興普及課 (Tel 0186-62-1835) へご連絡下さい。